

※記事・写真等は朝日新聞社の許諾を得て転載しています。
著作権は朝日新聞社に帰属。記事、画像等の無断転載は一切お断りしています。

「甘み」と「苦み」への感性 「青い山脈」の中にこそ

櫻田 淳 政治学者／'65年生まれ

日本でナシヨナリズムを語る際に抜け落とすことができないのは、近代以降の日本の歩みへの評価である。日本の歩みの「光」の側面に真っ先に目を向ける人々は、ナシヨナリズムと呼ばれるものを概ね肯定的なものとして受け止めるかもしれないけれども、「陰」の側面を強調する人々は、そのようにはしなかった。しかし、日本の足跡は、そのように、「光」なり「陰」なりだけを取り上げて解釈するにふさわしいものであろうか。

たとえば司馬遼太郎が『坂の上の雲』で叙述したような「明治国家」の「光」としての成功の裏には、新田次郎が『八甲田山死の彷徨』で描き出したような「陰」としての愚行の風景がある。その愚行は、後のノモンハン事件やインパール作戦に象徴される「昭和の愚行」の原形を思わせるものであるけれども、

紛れもなく司馬が描いた「光」の直前の出来事なのである。故に、「明治日本は立派であつたけれども、昭和は……」という議論は、実際には誤つたものである。近代以降、明治、大正、昭和、平成といった時代には、それぞれの時代の「光」と「陰」があり、人々は、その「光」と「陰」の中で様々な「甘み」と「苦み」の感情を抱きながら生を送っていたはずである。

筆者は、パトリオティズムと呼ばれるものの基盤を支えるのは、そのような「甘み」と「苦み」の双方をどれだけ愛しく思えるかという感性であろうと考えている。だいたい、一人ひとりの個人の領域でも、「光」一色の生涯がなければ、「陰」一色の生涯もない。そうした「光」と「陰」が綯い交ぜになつた自らの祖先からの来歴、さらには「甘み」と「苦み」の入り混じつた感情のすべてを受け継いでいくのが、「国を愛する」ということの基本的な作法である。無論、ここでは、他国との比較の上で、「世界に冠たる……」という言辞を振り回すのも、他国との関係の上で、「○○(特定の国名)、何するものぞ……」といった感情を先走りさせるのも、不健全なものであろう。

雨にぬれてる 焼けあとの 名も無い花
もふり仰ぐ

青い山脈 かがやく嶺の なつかしさ

見れば涙が またにじむ

父も夢見た 母も見た 旅路のはてのその
涯の

青い山脈 みどりの谷へ 旅をゆく 若
いわれらの 鐘が鳴る

おそらくは、日本の「戦後」は、この歌謡曲「青い山脈」の歌詞に埋め込まれた気分とともに始まつた。「旅路のはてのその涯」を日指した人々が辿り着いた「みどりの谷」が、現在の日本である。父祖以来の諸々の「甘み」と「苦み」の感情を抱え込んで、自らの行く末を見定めようとした「青い山脈」の歌詞にこそ、「国を愛する」ということの感性が伝えられている。

「愛する国」より
「愛される国」に

朱建栄 中国政治学者／57年生まれ

愛国心があるのは大多数の人間の常であろう。しかし各国の表現方法に違いはある。日本に來ている中国人留學生はよくこう言う。「愛国」をあまり口にしない日本人はそれをよく口にする中国人より、はるかに『愛国的』だ」

56の民族を有し、同じ漢民族でも各地に大きな違いがある中国では、「愛国」の対象を一つに絞るのは大変難しい。歴史上、だいたい、国の存亡・統合に危機が生じた時に政権側や知識人から「愛国」が叫ばれる。金や元の圧迫を受けた南宋時代、列強の侵略を受けた清朝末期、そして天安門事件と旧ソ連の崩壊直後の90年代がそうだった。

日本はどうか。「バカの壁」を書いた養老孟司さんは次のように指摘する。

「中国と違って日本はまとまりやすい国なので、原則を持ち込むと極端に走ってしまう。一億一心になった、その恐ろしさを、僕は、覚えていきますから」（『中央公論』2006年6月号）

正直に言つて、中国や韓国などはかつての軍国主義時代に対するおびえから今の日本国内で起きている「愛国心」の議論を眺める傾向がある。過剰反応ではあるが。

しかし中国は愛国を語つてもよいが、日本は語つちゃだめ、という理屈は通らない。歴史の教訓と今日の世界的な潮流を踏まえて、すべての国に共通して言いたいのは2点ある。

第一、一国の「愛国心」が他国、他人の利益を損なつてはならない。独善的に自分の国だけがすばらしいとするのではなく、他国の

文化も自分と同じように優秀であることを理解し、他人の愛国心も尊重すること。

第二、真に大多数の国民から愛される国になるよう、その中身を充実させる努力をもつと払うこと。中国は経済発展、国民の生活向上とともに、汚職腐敗・格差などの問題を是正し、個人の自由、政治の民主化を進めて、台湾の民衆を含めた全中国人にもつと魅力を感じさせるよう国作りを加速すべきだ。日本も、国民の老後・将来への不安を解消し、外国人留学生に差別を感じさせず、平和路線を今後も揺るがせないことを世界から信頼されるような国を目指して努力する余地が多々あるのではなからうか。